黙(もく)せし君(きみ)よ

かんべむさし

黙(もく)せし君(きみ)よ

かんべむさし

黙せし君よ
著者—かんべむさし　発行者—井上功夫
発行所　株式会社双葉社　東京都新宿区東五軒町三—二八　郵便番号一六二
電話・東京（〇三）五二六一—四八一八（営業）
（〇三）五二六一—四八三三（編集）
振替・東京八—一一七二九九
印刷所—大日本印刷株式会社　製本所—株式会社若林製本工場
落丁乱丁の場合は本社にてお取りかえします。
定価・発行日はカバーに表示してあります
©かんべむさし　一九九〇年　Printed in Japan

ISBN4-575-23070-7 C0093

目次

第一章　再会ふたつ……5
第二章　古市が死んだ……35
第三章　記録と記憶……82
第四章　深い底の妄念……141
第五章　そしていま……263

写真……朝日新聞社

装幀……ヴァンケット

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

黙せし君よ

第一章　再会ふたつ

1

平成元年。五月中旬の大阪梅田。

夜の地下街コンコースに、いつものように複雑な人の流れができていた。

残業の緊張がまだ解けていないのか、硬い表情をたもったままの男達。何かの会合の帰りらしく声高に喋りあっている女達。そして曽根崎や大融寺や北新地など、近くの盛り場で飲んで発散してきた連中。

さまざまな人間が、交差する複数の川を作りつつ、おのおのの目指す方向へと最短距離を取って歩いていく。地下鉄御堂筋線・谷町線・ＪＲ、それに阪急と阪神の両私鉄……

テナントもすでにシャッターを下ろしたこの時刻、ここはそれらターミナル駅への、通りぬけ広場となっているのだった。

そんななかのひとつ、曽根崎方向から阪神電車梅田駅へと流れてきた川のなかに、サラリーマンの二人連れが含まれていた。

「ちょうどいい具合に特急が出るね」

ちらりと腕時計を見て言った中背の男は、オフィス家具や関連機器の販売会社マナベスに勤める柏木喬。
「でも、それに乗ったら座れませんよ」
こたえたのはその若い部下。
「何を言ってるの。病人じゃあるまいし」
「いえ、課長がつらいかと思って。だって、老化は足から来るっていいますからね」
「あんたも言ってくれるねえ」
大阪支店の企業営業部第二課に所属する二人が、短い残業のあとごく軽く飲んで、同じ沿線にある家へと帰るところなのだった。
駅は地下二階にあるので、そこからさらに階段を下りなければならない。
「何ならケンケンで下りて見せようか」
痩せ型で身の軽い柏木は言い、ほろ酔いの気分良さも手伝って、途中二、三段は戯れにそれを実行したのである。
だが――
四段目にかかる寸前、その動きが突如止まって、彼の顔から一瞬で笑いが消えていた。
「！」
階段の下、改札口の手前に、突然ある男の姿が現れていたからだった。
といっても、驚いたのはその現れ方についてではない。右手にあるトイレから出てきたらしく、ハンカチを背広のポケットにしまいながら、自動改札機へと向かっている。それ自体は、どこにでもいそうな中年男の、ごくありふれた動作に過ぎないのである。

ならば、何が彼に衝撃を与えたのか。

それは、相手が二十余年ぶりに自分の前に出現したからであり、しかもその両者には、当時こういう関係があったからだった。

「おまえは俺を知らんだろう。それはそうだ。話をしたこともないのだからな。だが、俺はおまえをずっと見つめている。見つめて、殺意に近い感情を抱いているのだぞ……」

そんな男が、いま突然、眼の前に。

それが彼の表情をこわばらせたのである。

無論、柏木の豊かだった髪が歳相応に薄くなってしまっているごとく、相手の容姿にも変化は現れている。同じ学年の男だったから、浪人せずに入ってきていたとして、現在四十二歳。ずん胴だった体形が肥満気味になっており、濃くて硬そうだった髪はそのままだが、そこに白い物が混じっているのだ。

しかし、さきほどちらっとながらこちらにむけた顔と、いま改札をぬけていく後ろ姿には何の変化もない。四角い大きな頭。金壺眼に分厚い唇。そして、大物をもって自任しているような、肩をゆすった外股の歩き方。

「間違いない。あれは笠原だ」

その姿を眼で追いながら、彼は自分の口のなかが乾き、胸の鼓動が速くなるのを自覚していた。二十年という時間が突如消え去り、相手に対する攻撃的な感情が、当時の翌日と思える今日、高まってきたように感じていた。

そのとき彼は、「大学生」の意識をもってそこに立ち、視線を鋭くしていたのである。

だが次の瞬間には、柏木は声と音とによって社会人に戻らされていた。

「課長。どうしたんですか」
部下が不審気に聞き、同時にプラットホームでブザーが鳴って、特急の発車を告げるアナウンスが流れ始めたからだった。
「おっ。乗ろう」
彼は我に返って階段を駆け下り、定期券を出しながら走って、そのまま改札機を通過した。そのあとに部下がつづき、二人は他の駆け込み客とともに二番線ホームへ突進する。
そして最後部車輛一番手前のドアに飛び込んだとき、柏木は再度の衝撃を受けていた。
新聞でも買うつもりか、笠原がホームのスタンドへ歩み寄っていくところまでは眼で追っていた。その彼が二人の背後から走ってきて、最後尾のドアは一杯になってしまったため、ひとつ先のドアへと駆け込んだのだ。
「あいつもこれに乗るのか。急行や各駅停車にではなく！」
しかも、それがいつものことであろう証拠には、思い出してみれば彼はさきほど改札を通るとき、確かに胸に手を入れていた。つまり定期券を持ち、通勤をしているのだ。
ならば、その家はどこなのか。特急に乗るのだから、大阪市内や尼崎ではない。停車駅で言えば甲子園か西宮か。それともその次の芦屋、あるいはもっと先の神戸市内なのか。
ドアが閉まり、動き出した車内で、柏木は肩をこじるようにして半身になり、吊り革につかまる乗客達の間を透かして様子を探ろうとした。だが死角になっているのかその姿は認められず、そこでようやく、部下がもう一度聞いていることに気づいていたのだった。
「さっき、何かあったんですか」
「あ。いやいや」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

彼は苦笑する顔を作ってこたえた。
「確か同じ大学にいたと思う男が、突然四十男になって現れたんで驚いたんだ」
「ああ、そうなんですか」
相手はその言葉に、素直に納得した。
「ひさしぶりの関西だから、そういうことはよくあるでしょうね」
都府県名で言うなら、柏木は出身が徳島で大学が兵庫。就職してのちは福岡に五年ほどいて、以後ずっと東京で本社勤務をつづけてきた。実は大阪の支店へは、この年度替わりに転勤してきたばかりなのである。
無論、懐かしい土地へ戻ってきたわけだから、その風土に何の違和感も感じることはなく、支店の雰囲気にもすぐに溶け込めた。
だが二十年の空白はそう簡単には埋められず、ときに周囲をとまどわせることがある。
この部下にも、初めて一緒に帰ったとき古いことを言って笑われた。
「芦屋の浜に、すごい団地ができたね」
「そんなの、十年ほど前からありますよ」
だからいまも彼は、上司が年月の経過に単純に驚いたと、そう思ってくれたのだった。
特急は地下から地上、そして市街地の高架線路へとあがってスピードをはやめていく。
「野田か」
柏木は、頭の片隅ではあいかわらず笠原を意識しつつ、部下の善意の誤解に合わせた話題を捜して語りかけていた。
「このあたり、自動車の修理工場とか部品会社とかが多いだろう。大学の頃には、ごつい軍用トラッ

クをよく見かけたもんだよ」
「その頃は、自衛隊のトラックをこんなところで修理してたんですか」
案の定相手は乗ってきたのだが、そう聞かれてみると少しおかしくも感じられる。
「いや、そんなことはないな。うん。解体屋もあったから、多分それだろう。カーキ色がはげて、あちこち赤錆が出てたものな」
そして、ふっと気づいた眼で言った。
「あのトラック、ひょっとして自衛隊ではなく米軍のポンコツだったのかもしれないな。ベトナムでやられたとか何とかの」
「ベトナムですか」
「だって、まだ激戦中だったもの」
そして、それから部下が甲子園で下りるまで十分ばかり懐旧談をやり、何とか自分の外面をきさくな課長の域にとどめていた。
「お疲れさまでした。失礼します」
「あ、お疲れさん」
挨拶をかわしながら視線を走らせ、笠原が確かに乗っていて、まだ下りないことを確認するまでは、笑顔を保っていたのである。
甲子園を出れば、特急はそのさき五分ほどで西宮、さらに五分ほどで、柏木の下車駅である芦屋に停車することになっている
「……」
軽蔑と嫌悪の念をこめて監視していると、敵はスポーツ新聞を広げて読みながら、降車側のドアへ

と身体の向きを変えた。
柏木の唇が曲がり、眼に険しさが増す。
電車は高架から下りて走り、いくつかの駅を通過したのち速度を落とす。
新聞が畳まれ、停止してドアが開くと、下りる客達のあとについてその姿もホームに出た。なおも眼で追うと、同じホームの反対側で待機している各駅停車へと足をむけた。
「……あれに乗るのか」
そのことによって、姓のみ聞き覚えていて名は知らぬ男、笠原何某が、自分と同じ生活エリア内に住んでいることが明確になった。
この西宮と次の芦屋の間に駅はふたつしかなく、その間の距離も知れているからなのだ。
「くそっ。あの下司野郎めが」
動き出した車内から各停の車輛を睨みつけ、柏木はドアのガラスに、右手のこぶしを強く押しつけていたのである。

2

「お宅は確か千里の方でしたよね」
一人が発する軽い調子の質問に、すでに五本目になる煙草に火をつけながら、もう一人が義務的にうなずいて平板にこたえた。
「ああ、そうだよ。桃山台だ」
「あのあたりも、どんどん値上がりしてるんですってねえ。知り合いが去年三千何百万で買った中古

マンションが、いますでに五千万を越してるとか言ってましたよ」
「ふん」
「伊吹さんは、いつ買われたんです」
「結婚したときさ。三十で結婚したから、いまからなら十三年前だ」
「じゃあ、三倍くらいにはなっているはずだ。すごく儲けたじゃないですか」
煙を吸って、吐いて、大柄で胸の分厚い彼は、飲み干したコーヒーのカップに眼をやりながら面倒臭そうにこたえた。
「別に儲けはしてないさ。株と一緒で、売らない限り現金は入らないんだから」
相手はちょっと鼻白んだ。
「それはまあ、そうですけれど……」
北区の中央テレビ放送本社ビル。
その一階ロビー横にある喫茶室で、プロデューサーの伊吹良介が、タレント事務所のマネジャーと雑談をしているのだった。
まわりの席では、営業マンが代理店の男とうちあわせをしたり、番組宣伝の担当者が情報誌の女性編集者と会ったりしている。
話し声があり、笑い声が起き、そこへときおり、天井のスピーカーから呼び出しの女声アナウンスが流れてきたりもする。
「東通のヤマダさん、東通のヤマダさん。2スタまで御連絡ください」
ざわざわとしていて、それは無論活気ではあるのだが、逆にそこにけだるさを感じてしまいそうな午後の三時過ぎなのである。

そして伊吹はその種の雰囲気に敏感であり、それに対する自己の反応が、強迫観念的な型を有していることも自覚していた。

物憂さがあたりに漂い、自分が半透明の膜に包まれたように思えてきて、周囲からの声や音もそれを通して聞こえ出す。ミーティング・ルームで企画会議をやっているときにも、番組収録でスタジオの副調整室に入っているときにも、それが始まることがある。

そういうとき、彼はすべてが面倒になり、何もかも投げ出してしまいたくなってくる。

しかし、それはできないとわかっているため逆にいらいらとして不機嫌になり、心に破壊衝動の広がるのを感じるのである。

くそ。何だこの空虚なざわめきは。こいつら何を考えとるのか。俺はいったい何をしておるのか。こういう日常は、一度徹底的に崩壊させた方がいいのではないのか……

そしていま、まさに起き始めたその反応が、彼の大きな眼をひらかせていたのだった。

おまけに、以前からの顔見知りであるこの三十過ぎのマネジャーを、伊吹は内心で退屈な男だと思っていた。通り一遍の知識や情報を断片的に話題にするだけで、そこには分析もなければ批評もない。ましてユーモアやアイロニーには程遠い感覚しか持ってないようで、話が心地良く発展しないのだ。

といって、仕事上のつながりは大切にしなければならぬから、せっかく顔を出してくれた者を邪険に扱うわけにもいかない。

「……最近はどこで飲んでるの」

精一杯に心の波を押さえたあげく、なおダレそうだと感じる質問をしていたのである。

「ミナミが多いですね」

相手は唇をなめて言った。
「こないだ行ったクラブには、中国人のホステスが入ってましてねえ」
「台湾？」
「いえ、中国ですよ。割りに愛想のいい子でね、上海から来たって言ってました」
「ほう」
口をすぼめて声を出すと、相手はこの話題なら会話が広がると思ったのか、嬉しそうな顔になって情報の提供にかかった。
「ほかにもね、これは日本人ですけど、すごい美人がいましたよ。あれ、どこかのモデルがバイトしてるのかもしれないなあ」
「あ、いや」
伊吹は灰皿に煙草を押しつけ、いま俺が聞きたいのはそういうことではないのだという意味をこめて、あいた手をちょっとふった。
「その中国の女性、何か言ってたかい」
「というと？」
「いや。要するに名目は語学留学か何かで、実は働きに来てるんだろう。それについてとか、日本の印象とかをさ」
「ああ、そういうことですか。ええそれは勿論、そんなことも聞きましたけどね」
マネジャーは少し首をかしげて思い出す眼になり、それから断片記憶を披露した。
「船で神戸へ着いたとき、車が多いのに街が静かなんで驚いたそうですよ。むこうは警笛だの自転車のベルがすごいんだと」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com